

## 第 58 回全国学童保育研究集会（20231104~20231105）レポート

【クラブ】（あそびばクラブ）

【名 前】（島田歩実）

### ①2 日目に参加した分科会のタイトルをお書きください。

#### 第（2-⑤）分科会 （高学年にとっての学童保育）

※全体会のみに参加の場合は、全体会の記念講演のタイトルをお書きください。

### ②この分科会を選んだ理由をお書きください。

・「最近あそびばクラブの高学年の登所人数が減ってしまったこと」

夏休み明けから特に 4~6 年生の登所が減りました。今は 4~6 年生合わせて平日は 4 人程の人数です。なぜこんなにも減ってしまったのか。「4~6 年生は部活も始まるし、習い事もあるし、家で過ごすという選択肢もできるようになるし、そうなるが減るよね」と考えているだけでいいのか…？毎日ではないにしてもたまにはあそびばに帰ってやるか、と思うことができる環境づくりになっていたのかな？高学年の子たちが求めているものを考えたいと思ったため選びました。

・「高学年の子たちならではの関わり方の難しさを日々感じること」

日々の関わりの中で高学年って、子どもなようで大人で、でも大人なようでやっぱりまだ子どもなのだなど感じる瞬間が多いです。だからこそ、言葉の選び方、声を掛ける頻度やタイミング、距離感等、高学年の子たちとの関わりに難しさを感じます。また「来てくて来てるわけじゃねーんだよ」という言葉を高学年からもらったことがあります。いろいろ葛藤しながらもそれでも来てくれているその気持ちに少しでも寄り添うことができるようにしたい。そのためにどのように皆さんが工夫して接していらっしゃるのか学びたいと思ったため選びました。

### ③2 日間の全体会と分科会で心にのこったことや気づいたことや学んだこと、今後の実践に活かしていきたいことなど、感想もふくめてお書きください（自由記述）。

年に 1 度の全国の指導員さんたちと関わることでできる機会。画面越しではありましたが、様々な方言が飛び交う中での交流は毎年とても刺激的で学びがいっぱいで、同時に励まされます。

全体会では、オープニングにて様々な地域の子どもたちの発表に元気をもらいました。神奈川県の子どもの子どもたちが披露してくれた学童の歌の歌詞に、「ドアをあけていつもの笑顔にほっと一息、みんなと集まる放課後に心もからだも温まる」というものがありました。“いつもの笑顔にほっと一息”っていいなと思いました。子どもたちが楽しく過ごすことができるように生活に変化を加えることも大切なので楽しくなるようにこれからも工夫していきたいです。でも、「おかえり」とどんな日も変わらず迎えること、それだけでほっとしてくれる子もいるのかなと思うと嬉しくなりました。変わらずにいることも大切にしていきたいなと感じました。

基調報告では、「安心して安全に、継続して過ごすことができるように」というお言葉が繰り返し出てきていました。一時の居場所ではなく、子どもたちにとっても保護者の方にとっても継続的な居場所となっていくことが求められているのだと思います。これは簡単なようでとっても難しいことだと実感

しています。学童という存在も指導員の存在も継続的な居場所となっていくためには、長い目で見て関わっていくこと、どんな様子でも諦めずにいろいろな方法でこちらから接し続けていき信頼関係を地道に築いていくこと、を自分の中で大切にしていきたいなと感じました。

特別報告では、3つのお言葉が特に印象に残っています。1つ目は「子どもたちの笑顔、笑い声は間違えずに人々を明るくする」というお言葉です。どれだけ、もー！となってしまうことがあっても、無邪気に笑っている子どもたちを見ると、もー！っていう気持ちがいつのまにか吹き飛んでいきます。子どもたちの笑顔はすごいパワーがあるんだなともいつも思うし、こんな風は無邪気に笑う時間をどの子ども増やしていきたいなと思います。指導員がぶりぶりしていると、子どもたちが無邪気に笑えなくなってしまうので、心から無邪気に笑うことのできる環境に引き続きしていきたいです。

2つ目は「指導員だからと、自分のこだわりを通そうとすると子どもたちから真っすぐにこうしたいと声があがった。子どもたちが主人公である」というお言葉です。大人の都合を優先してしまったり、子どもがやりたいという思いに、実現できるかどうかは別としても耳を傾けることすらできなくなってしまうと、ということは極力避けていけるようにしていかなければと感じました。今生活の中で「子どもたちと話し合う」という時間をもつことができるように自分なりに意識をしています。子どもたちから出てきた声を「まずはやってみる」という気持ちを大切にしていきたいと思っています。声を出しても結局大人の思うように進んでいく、ではなくて、自分たちの声に耳を傾けてくれているんだということが日々の生活の中で少しずつでも伝わっていくことを目指していきます。大人が軸となり生活を進めていくことと、子どもたちの声を採用していきながら生活を進めていくことのバランスに今は難しさを感じているところです。まずはやってみようの精神を大切にしていきたいなと思います。

3つ目は「人との関わりこそ、自分のもつ全てのエネルギーで。諦めてはいけない」というお言葉です。人と関わることは、何を考えているのか、どうやったら引き出せるのか、どうしたら伝わるのか、どのタイミングで、どの言葉を選ぶのか、どのくらいの時間を使うべきなのか、等すごくすごくいろいろなことを考えます。思いが最初から通じ合うことなんてほぼほぼなくて、ああ今の言い方失敗したな、今のはどういう意味だったんだろう、とかいろいろやっぱり考えてしまいます。相手が何を考えているのかななんて、子どもも大人も分からないけれど、それを分かりたいと思うこと、分かろうとしていくことが大切なので、こちらから歩み寄ることをやめてはいけないなと改めて感じました。

全体会では、「豊かな子ども時代や魅力的な経験ができることって幸せだし、それが心の奥底から人生を励ますことになるだろう」というお言葉が特に心に残っています。2年生の途中で学童をやめたよという丸山先生は、「懐かしい大切な記憶」として学童での思い出を思い出すと仰っていました。これは今の私にとっても勇気づけられるお言葉でした。「いつかもっと大きくなった時に、あああゆみがよく分らんけど口うるさく言っていたな」とか「こういうことやったなあ」と、悪い思い出としてではなく、今の学童生活を懐かしい思い出として思い出してくれればいいなという、自分の中での最終目標があるからです。大人になってからも思い出す今の時間を、子どもたちとこれからも大切に過ごさせて頂きたいと感じました。何かができ嬉しかった、できなくて悔しかったという思い出だけではなく、覚えている思い出は意外と「見た景色」とか「みんなの足音」とかそういうものなんだなとも感じました。それは数日とかではなくてある程度「継続」してみんなで生活し関わり合っていたからこそ、今もぼんやり思い出すのかなと思うし、そういう一見特別でもないような思い出が、子どもたちの背中を押したり、頑張ろうという原動力になっていたりしたらそんな嬉しいことはないなと思いました。

「一緒にその場の時間や空気を共有している」というお言葉も心に残っています。「イベント(室内でのイベント)やらない」と言う子もいます。そういう時に、一緒に楽しもうよと思うので声を掛けるけど、楽しい雰囲気や空気の中にその子もいる、ということだけでも何か感じるものがあるのかな、直接的に参加できなくても一緒に空気を感じるだけでまずは十分なのかなと思いました。でも何を考えて参加しないと行ったのかなという気持ちを探っていくことはしていきます。反対に、指導員が叱っている空気も全体のみんなが共有してしまっているということも心に留めていないといけないなと感じました。

分科会では、多くの参加者の方が高学年の子どもたちとの関わりに試行錯誤しながらももがいていらっしゃることを知ることができて励まされました。「高学年になって自然と低学年よりは手がかからなくなっていくけど、高学年も要求はもっている。自立したい、でもまだまだ大人を頼りにしていきたい、けどやっぱり自立したい…と揺れ動いている」というお言葉が特に心に残っています。

まず一番に、「ひとりひとりその子が求めている要求や思いを探ること」をやっていきます。でも高学年の子どもたちとの生活の中で、葛藤している高学年に私はいきなり距離を詰めすぎかなと反省しました。距離を詰めすぎると余計に反発したくなるし、ますますしゃべりたくなくなるよなと思います。善悪の判断とか、こうした方がいい、とかきっと分かっている。その分かっているよね、の部分をお叱りではなく、分かっていたことを認める。そして「分かっているけど…本当は…」の気持ちの部分を知ろうとしていきたいと思いました。だからといって「どうしたいの?こうなの?ああなの?」とくどくどききすぎてしまうのではなく、そこが自分にとっては特に難しいけれど、「いつでもきくよ」「今日何かイヤなことあった?」「いい事あった?」とあなたの様子に気付いていますよ、ということを手は離すけど目は見ているみたいなイメージで、ひとりひとりに合わせた程よい距離感で表していきたいです。求めてきてくれた時は、もちろん全力で応えたいです。「その子をどういうまなざしで大人が見るかが大切」と仰っていた方がいました。みんなそうですが、「困った子」というまなざしで見るとは、「高学年」「あそびばの頼れる存在」というまなざしで目の前の高学年をもっと信じて見守っていくことを大切にしていきたいなと感じました。

「要求をもっている」というその要求をどう引き出してあげられるか…?難しいですが、室内イベントの時に、高学年の子がやりたいと言ってくれたゲームをカタチにしたらすごく喜んでくれて、ノリノリで参加してくれた4~5年生の姿を見ることができてすごく嬉しかったです。それが理由ではないかもしれないですが、次の月はいつもより多く登所してくれたように感じさらに嬉しく思いました。「何したい?」ときいて要求が出てくる子もいると思うけど、くどくどきくだけではなく、何気ない日々の中でぼろっと出てきた思いや要求を、きちんと覚えていて、大切に拾い上げてカタチにしていけたらいいな、さらには一緒にカタチにしていけたらいいなと感じています。強要は決してしないけど「一緒にやる~?」と必ず声を掛け、数少ない高学年の子たちが少しでも寂しく感じないようにもしたいです。

最後に、やっぱり高学年の子が少ないと寂しいなと感じます。「家で過ごすことができる」「やりたいことが増えた」という成長は花丸だと思います。でも「たまには学童行ってみるか」「いつでも迎えてくれるだろう」というように「いつでも待っていてくれるという安心感」「たまには行こうかなと思うことができる魅力」を指導員全員で協力してひとつずつ地道に積み上げていきたいなと思います。

※提出されたレポートは、当会の広報紙やホームページに掲載する場合があります。あらかじめご了承ください。

※×切は、11月30日(木)です。常勤専任指導員に手渡し、または、okazakigakudou@yahoo.co.jpまでお送りください。